

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Arabic Linguistic Studies in Japan : A Bibliographical Survey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫, 中道, 静香 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004059

日本におけるアラビア語研究文献目録

西尾哲夫*・中道静香**

Arabic Linguistic Studies in Japan: A Bibliographical Survey

Tetsuo Nishio and Shizuka Nakamichi

This paper is a bibliographical survey of linguistic studies of the Arabic language in Japan. The following bibliography includes the studies concerning the usual linguistic domains, such as phonetics, phonology, morphology, syntax, semantics and studies on the Arabic writing system (including calligraphy), as well as those concerning Arabic traditional grammar, and the linguistic aspects of Arab society and Islamic culture, and also Arabic teaching materials. This survey is part of the research result of *Survey of Arabic Studies Database* (Research representative: Tetsuo Nishio), which was funded by a scientific research grant from the Ministry of Education, Science, Sports, and Culture in Japan (Grant-in-Aid for Scientific Research: Grant No. 09551008).

1 はじめに

3 日本におけるアラビア語研究文献目録

2 最近の研究動向

* 国立民族学博物館民族文化研究部

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

Key Words : Arabic, linguistics, bibliography, Arab, Middle East

キーワード：アラビア語，言語学，文献目録，アラブ，中東

1 はじめに

本文献目録は、日本における明治以降のアラビア語に関する言語学的研究を網羅した文献目録であり、平成9～12年度の文部省科学研究費補助金による研究「国際アラブ研究情報ネットワーク参画の基盤構築とアラブ電子百科事典システムの開発」（研究代表者：西尾哲夫、課題番号：09551008）によって構築したデータベースをもとにしている。狭い意味での言語学の研究分野である、音声学・音韻論・形態論・統語論・意味論、さらには文字学はもとより、アラブの伝統文法に関する研究や、アラブ世界における社会や文化と言語の関係に関する研究、より実用的な分野である辞書類や語学教材などについても可能な限り収録した。

2 最近の研究動向

古くは漢籍の中国語、近世以降は南蛮渡来の事物によるポルトガル語やスペイン語、江戸期のオランダ語などを通して、アラビア語に起源を持つ多くの借用語が日本語に導入されて現在でも使われている。しかしながら、学問的な関心がアラビア語に向けられるようになったのは、昭和になってからのことである。戦前戦中の日本占領地域にイスラム教徒が多かったため、イスラム教への学問的関心の一部としてアラビア語にも幾分かの関心が向けられたが、日本を代表するイスラム学者、井筒俊彦のアラビア語入門書に見るように、アラビア語自体への言語学的関心というよりは、コーランをはじめとするアラビア語文献を読み解くために必要な道具を開発するという面が強かった。

1958年、戦後の言語学において重要な意味を持つ著作が出版された。ノーム・チョムスキーの『統語構造』である（クロード・レヴィ=ストロースの『構造人類学』も同年に出版された）。アメリカでは、構造主義的な分析による研究やチョムスキーの生成文法理論による研究があいついで発表されたが、その多くはアラビア語を母語とする研究者の手になるものである。そのため、従来のアラビア語研究の成果を新しい枠組みで再提示するだけであったり、生成文法学派によるアラビア語研究の場合に見られるように、古典アラビア語の文法規則を變形文法的に読み替えるだけで満足したり、アラブ古典文法の分析概念との類似性を指摘するにとどまり、アラビア語文法に関する新しい知見を提示するものはほとんどなかった。

日本の言語学界は、英語の分析をめぐる研究に関してはアメリカの学問的流行に敏感であったし、東京および大阪の外国語大学を中心にアラビア語研究が行われてきたこともあって、一般言語学的理論的な見地からは比較的自由的な研究がなされてきた。類型論、機能文法、談話分析などの言語の機能的記述に焦点をあてた研究に重心が移動してきたため、近年は言語理論の動向を取り込みながらアラビア語の文法特性に関する新知見を提示する研究、現地調査による研究、女性語や言語ナショナリズムに関する研究などのように広い視野からのアラビア語研究が増えてきた。次に、世界のアラビア語研究と関連させながら、個別の研究を見てみよう。

まずアラビア語を概観する上で重要な『言語学大辞典』（三省堂）は、日本の言語学の現状を示す画期的な仕事であるが、残念ながらアラビア語に関する記述は一昔まえの研究水準にとどまっており、高階美行による現代方言分布図を除くと最近の研究成果はほとんど取り入れられていない。

アラブ伝統文法は、コーランを正確に解釈して暗記するための学問として発達し、後にはコーランの言葉をもとに生まれた古典アラビア語を読み書きするための技術として体系化された。学習者の記憶のため、できる限り簡便な文法規則を求めつづけたアラブ古典文法家の態度が現在の変形生成文法と類似する分析概念を生み出したことは、多くの研究によって指摘されている。アラブ伝統文法に関する研究としては、文法用語の内容を明らかにした内記（1968）、現代言語学からの考察を行った岡崎（1991）、中江（1997b）のものがある。アラブ伝統文法学が確立されて古典アラビア語が規範化された11世紀ごろを境に、口語アラビア語あるいは地域方言の出現に伴って、アラビア語は構造的な変質を見せた。池田（1968; 1970a; 1973）はドグマとして規範化される以前のアラブ文法学を通して、コーランを代表とする前古典アラビア語の実態にせまろうとする意欲的な研究である。同研究は、バスラ学派とクワファ学派の二大文法学派の影響関係を明らかにしたり、アラブ文法家の祖とされるシーバワイヒの記述から当時のアラビア語を再構成するといった最近の欧米での研究動向ともつながっている。言語学的思想史一般のなかにアラブ伝統文法を位置付けようとする研究も近年盛んになってきたが、『言語学大辞典』中の概説的著述があるのみである。

膨大な碑文資料のデータベース化や考古学的調査による新発見によって、イスラム以前のアラビア語研究は近年盛んになってきたが、高階（1984）はデダン語とみなされてきた碑文を整理して真性のデダン語とみなせるものと疑わしいものに分類した労作である。アラビア文字の起源について、薮（1988）は南アラビア語との関連で議論

する。また川床（1992）は発掘された文書をもとに初期アラビア語の数字をめぐる書記法に関して考察する。

アラビア語の歴史言語学的研究は、当時の言語事実を明らかにする資料がほとんどないためにあまり進展してこなかった。福原（1974）は、セム語比較言語学の立場からアラビア語の歯音の通時的変化を考察する。西尾（1991）、Nishio（2000）は、ヘブライ文字で書かれたユダヤ・アラビア語のゲニザ文書に基づく中世の口語アラビア語研究である。Nishio（1996c）は様々な資料をもとに、エジプト方言の特異な疑問詞後置構文の通時的変化を考察する。Yoda（2000b）は北アフリカ方言の母音体系に関する通時的変化の過程を類型化し、それによる方言分布を説明する。古典アラビア語の統語構造の通時的変化に関してはほとんど関心がはらわれてこなかったが、森口（2001a）は条件文の変化を探る野心的な研究である。

次に共時的な文法研究に目を向ければ、これまでのアラビア語研究では、弱動詞の母音交替の規則化などのように形態論的（あるいは形態音韻論的）研究が主流であり、最新の音韻理論による研究もさかんである。しかし、統語理論や文レベルをこえたテキスト意味論の隆盛におうじて、アラビア語の統語論やディスコース分析がさかんに行われるようになった。伴（1986）は否定語の用例と機能について古典アラビア語資料を博搜した研究である。西尾（1989a）、近藤（1999）は動詞のテンス・アスペクト体系についてとくに統語的環境との関連から考察したものであり、Nishio（1988a）はモーダリティの研究である。上記の西尾の研究は両者ともにコーランを分析対象とし、前古典アラビア語を代表するコーランのアラビア語の段階では、古典アラビア語とは異なる動詞体系が機能していたことを論証しようとしたものであり、Nakamichi（1999）もコーランをもとに接続詞の機能を文をこえた談話レベルから考察する。榮谷（1998b; 1999）、Kondo（2001）は現代アラビア語を対象としており、文をこえたレベルからそれぞれ名詞の定性や完了形の否定の問題に関して新たな知見を提示している。

最近の研究の特徴は、文献を渉猟した上での豊富な実例をもとに統計的分析をしていることと、言語による認識構造の分析までせまろうとすることである。人間が言語によって外界を認識し表現している以上、言語の分析を通して話し手が抱く世界認識の構造を明らかにできるはずである。井筒俊彦の代表的研究である Izutsu（1959）は、コーランで使用されている特定語彙の意味構造を分析することによって宗教的世界観を抽出しようとした画期的な仕事であった。しかし最近の意味論の展開から見ると、対立や分布などの手法によって、特定の語彙が有する意味体系を分析する構造主

義的意味論にはおのずから限界があり, proto-type 意味論や認識言語学などの知見をもとに, 井筒の成果を再検討してみる必要があるだろう。Nishio (1996) はフィールド調査の成果をもとにワーディに暮らすアラブ遊牧民の空間認識の構造を明らかにし, それに基づく彼らのメタファー的世界観を分析している。

国際アラビア語方言学会 (AIDA) の設立と活発な議論に見られるように, フィールド調査に基づく方言研究は近年とくにさかんになっている。Nakano (1982), Nishio (1992c; 1994) などは貴重な研究である。Nutahara (1982), 清水 (1991) も文化人類学的な関心からの貢献である。

言語と民族・国家に関わる問題は, エスニシティ, 言語ナショナリズム, 言語政策などともからみあい, 言語学 (言語社会学) だけでなく民族学 (文化人類学), 地域研究などをふくめた学際的研究テーマとなっている。サーレ (1998, 1999) は日本における国語の形成過程との比較からとくにエジプトにおける言語ナショナリズムの歴史を論じた。欧米での研究が十分にフォローされていないことが残念ではあるが, 日本語が提示する問題意識を取り込んだ, エジプト人による日本語の著作という意味で貴重な貢献である。Nishio (2001) は, アラブ民族の成立やイスラム的文明語としてのアラビア語の特性とからめつつ, アラブ世界における言語ナショナリズムの問題を広い視野から論じた。

日本における近年のアラビア語研究は, 国際的な研究動向と問題意識を共有しながら重要な貢献をしているが, その土台には Oh (1997), Bouslama (1999), Wahba and Miller (1997) をはじめとする海外研究者との活発な学術交流があることを指摘しておきたい。日本のアラビア語研究が世界レベルの重要な貢献をするようになった一方で, いまだに包括的な日本語によるアラビア語の辞書がないという状況を考えるとき, アラビア語と日本語の対照研究をふくめた研究がもっとなされるべきであろう。

なお, 以下の文献目録を作成するにあたり, 『日本における中東・イスラーム研究文献目録——1868-1988年』(ユネスコ東アジア文化研究センター, 1992) および同書のオンライン検索 (<http://www.toyo-bunko.or.jp/OnlineSearch/IslamME.html>) を参照, 利用させていただいた。

3 日本におけるアラビア語研究文献目録（五十音順）

- Anani, Mohammad (1985) "Phonetic description of Arabic consonants by early Arab linguists" 『音声学会会報』 179. pp. 14-17.
- 安藤計助 (1981-1982) 「商業通信文 (1)-(2)」『季刊アラビア語』 2-3. pp. 86-104, 20-43.
- 飯野昭夫 (1999) 「アラビア語接続法についての一考察——従属節におけるスペイン語の接続法との対照」『語学研究』 92. pp. 1-38.
- 飯森嘉助 (1972a) 「アラビア語学習の手引」『海外事情』 20: 10. pp. 43-50.
- 飯森嘉助 (1972b) 「ハムザの正字法」『語学研究』 1. pp. 1-28.
- 飯森嘉助 (1973-1977) 「アラビア語基礎単語 (1)-(10)」『語学研究』 2-11. pp. 93-131, 105-151, 83-124, 87-108, 127-156, 113-125, 101-116, 135-155, 165-188, 119-140.
- 飯森嘉助 (1974) 『日・英・アラビア語——実用アラビア語会話単語集』東京：ウラオカブリントン出版部.
- 飯森嘉助 (1975) 「古典文法と方言との比較による KaNa とその類似動詞に見られる用法上の変遷」『スカラベ』 6. pp. 1-7.
- 飯森嘉助 (1976) 「アラビア文字の承譜」『日本サウディアラビア協会報』 67. pp. 2-6.
- 飯森嘉助 (1978a) 「アラビア語における双数形——文語編」『語学研究』 14. pp. 45-58.
- 飯森嘉助 (1978b) 「アラビア語における双数形（口語編）——統辞論的カテゴリーから数の代用物へ」『語学研究』 15. pp. 1-5.
- 飯森嘉助 (1979) 『実用アラビア語会話単語集（増補新版）』東京：ユナイテッド・パブリッシャーズ出版部.
- 飯森嘉助 (1980a) 「アラビア語とイスラム」『大学時報』 29: 151. pp. 50-53.
- 飯森嘉助 (1980b) 「アラビア語の世界」『月刊言語』 9: 8. pp. 52-59.
- 飯森嘉助 (1980-1981) 「アラビア語における翻訳借用 (calque) について (1)-(2)」『季刊アラビア語』 1-2. pp. 72-79, 113-117.
- 飯森嘉助 (1981) 「アラビア語の辞典に寄せて」『中東経済研究所報』 25. pp. 33-37.
- 飯森嘉助 (1981-1982) 「新アラビア語講座 (4)-(5)」『アッサラーム』 24-25. pp. 100-109, 99-109.
- 飯森嘉助 (1985-1987) 「アラビア語基本単語 (6)-(14)」『語学研究』 42-49, 51. pp. 1-25, 155-168, 49-60, 89-103, 341-350, 41-55, 67-81, 125-139.
- 飯森嘉助 (1986-1988) 「アラビア語講座 (1)-(5)」『アッサラーム』 36-40. pp. 58-70, 66-70, 66-70, 66-69, 66-69.
- ユースフ, 飯森嘉助 (1989-1994) 「アラビア語講座 (7)-(21)」『アッサラーム』 43-51, 53-54, 56-59. pp. 70-73, 68-71, 68-71, 68-71, 68-71, 68-70, 68-70, 69-70, 68-70, 68-70, 68-69, 68-70, 68-70, 68-70, 68-70.
- 飯森嘉助, 黒田恒男 (1976) 『アラビア語入門』東京：泰流社.
- 飯森嘉助, 那須宗一 (編) (1982) 『英・和・アラビア語電気用語辞典』東京：ワセダ・プランニング・クリエイト.
- Iguider, Youssef and Yasuhara, Makoto (1996) "An active recognition of handwritten isolated Arabic characters" 『計測自動制御学会論文集』 32. pp. 1267-1276.
- 池田 修 (1968) 「ABU L-ASWAD D-DUALI をめぐって」『大阪外国語大学学報』 19. pp. 61-69.
- 池田 修 (1970a) 「9世紀以前のアラビア語の研究」『オリエント』 11: 3/4. pp. 121-160+198-199.
- 池田 修 (1970b) 「10世紀以降のアラビア語研究の歴史」『大阪外国語大学学報』 22. pp. 35-49.
- 池田 修 (1972) 「文法学派と都市」『「イスラム化」にかんする共同研究報告』 5. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp. 173-209.

- 池田 修 (1973a) 「アインの書について」『オリエント』16: 1. pp. 75-95+205.
- 池田 修 (1973b) 「アラブ文学における 'Āmil 論」『大阪外国語大学学報』29. pp. 25-33.
- 池田 修 (1976) 『アラビア語入門』東京: 岩波書店.
- 池田 修 (1978) 「アラブの諺」板垣雄三 (編) 『中東ハンドブック』東京: 講談社. pp. 330-346.
- 池田 修 (1980) 「Sa と Sawfa」『季刊アラビア語』1. pp. 17-22.
- 池田 修 (1981a) 「アラブにとっての言語と宗教」板垣雄三, 川床睦夫 (編) 『シンポジウム アラブとは何か』東京: 中近東文化センター. pp. 102-110.
- 池田 修 (1981b) 「Qad の用法」『季刊アラビア語』2. pp. 19-32.
- 池田 修 (1982) 「イスラム教徒の学問——バスラ学派とクラーファ学派」杉勇, 前嶋信次 (編) 『オリエント史講座 4——カリフの世界』東京: 学生社. pp. 124-140.
- 池田 修 (1985a) 「アラビア語とアラブ人」矢島文夫 (編) 『民族の世界史 11 アフロアジアの民族と文化』東京: 山川出版社. pp. 243-266.
- 池田 修 (1985b) 「エジプトにおけるアラビア語の歴史」『イスラム世界』23/24. pp. 1-15.
- 池田 修 (1992a) 「アラビア語学徒の道標——サッチャーから千夜一夜物語まで」『中東研究』367. pp. 17-21.
- 池田 修 (1992b) 「アラビア語方言特性名の検証」藤本勝次・加藤一朗両先生古希記念会 (編) 『中近東文化史論叢』pp. 119-134.
- 池田 修 (1992c) 「萌芽期のアラビア語研究」『アルアラビーヤ』1. pp. 37-49.
- 池田 修, 竹田 新 (1981) 『現代アラビア語小辞典』東京: 第三書館.
- 石原忠佳 (1996) 「アラビア語におけるクラーファ体の特徴とその変遷——南スペイン史との関連から」『創価大学外国語科紀要』6. pp. 67-85.
- 石原忠佳 (1997) 「南スペイン (アンダルス) のアラビア語における言語学的諸相——音韻論的立場から」『地中海学研究』20. pp. 127-151.
- 石原忠佳 (1998) 「古典アラビア語とアラビア語の諸方言化——エジプト口語とモロッコ口語の語彙比較から」『創価大学外国語科紀要』8. pp. 97-119.
- 石原忠佳 (2000a) 『モロッコ・アラビア語——標準アラビア語対照 会話と文法』東京: 大学書林.
- 石原忠佳 (2000b) 「Spanish Arabic に関する一考察——その歴史的背景と音韻的特質」『創価大学外国語学科紀要』10. pp. 35-62.
- 泉井久之助 (1981) 「アラブ語の興味——言語と哲学」『季刊アラビア語』2. pp. 1-5.
- Izutsu, Toshihiko (評) (1939a) "Anastas Mari al-Karmali, Nushū' al-lughat al-'arabiyyah wa numū'uhā wa iktihālūhā, Cairo, 1938 (アラビア語の起源, 発達及び得熟)" 『言語研究』4. pp. 106-109.
- 井筒俊彦 (1939b) 「最近のアラビア語学」『言語研究』3. pp. 110-116.
- 井筒俊彦 (1950) 『アラビア語入門』東京: 慶応出版社.
- 井筒俊彦 (1955) 「アラビア語」市河三喜, 服部四郎 (編) 『世界言語概説 (下)』東京: 研究社. pp. 1155-1221.
- Izutsu, Toshihiko (1959) *The Structure of the ethical terms in the Koran: A study in semantics*. Tokyo: Keio Institute of Philological Studies. (牧野信也 (訳) 『意味の構造——コーランにおける宗教道徳概念の分析』東京: 新泉社).
- Izutsu, Toshihiko (1964) *God and man in the Koran: Semantics of the Koranic Weltanschauung*. Tokyo: The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies.
- Izutsu, Toshihiko (1965) *The concept of belief in Islamic theology: A semantic analysis of Imān and Islām*. Tokyo: The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies.
- 井筒俊彦 (1984) 「スーフィズムと言語哲学」『思想』720. pp. 1-21.
- 井筒俊彦 (1988) 「言語現象としての『啓示』」『イスラーム思想 2——イスラーム思想の特質』東京: 岩波書店. pp. 3-48.

- 糸田明子 (1996)『アラビア語の初歩——初心者にもわかりやすい』東京：泰流社。
- 井上レイラ，黒田壽郎 (1985)『250語でできるやさしいアラビア語』東京：白水社。
- 岩永 博 (1939)「アラビア文字の近代化一斑——特にエジプトのアラビア文字改良についての法令」『回教園』2: 6. pp. 53-59.
- 上野悌嗣 (1992)『実用湾岸方言アラビア語』東京：日本サウジアラビア協会。
- 江村裕文 (1982)「アラビア語関係文献」『季刊アラビア語』3. pp. 85-91.
- Elsherbeny, Maher (1999)「アラビア語と日本語における受身形の対照研究」『Nidaba』28. pp. 98-107.
- 大里泰弘 (1985)「アラビア語文語の文連結詞の wa, fa について——談話研究の観点から」『九大言語学研究室報告』6. pp. 57-67.
- 大竹孝司 (1986)「アラビア語と日本語における補償効果 [英文]」『音声学会会報』189. pp. 19-24.
- 大塚和夫 (1980)「アッラーに選ばれた言語」『月刊言語』9: 8. pp. 6-11.
- 大西 圓 (1981)「見本市のアラビア語」『季刊アラビア語』2. pp. 105-112.
- 大西 圓 (1982)「石油のアラビア語」『季刊アラビア語』3. pp. 4-19.
- Oh, Myung-Keun (1997) "A study on Arabic diglossia: Historical background and spectroglossia" 『日本中東学会年報』12. pp. 313-328.
- 岡 真理 (1998)「『ことば』の占有をめぐる——現代アラビア語」大塚和夫 (編)『暮らしがわかるアジア読本 アラブ』東京：河出書房新社. pp. 105-112.
- 岡崎英樹 (1991)「コーランにおけるアラビア語の受動態について」『Nebulae』15. pp. 37-88.
- 岡崎英樹 (1993)「アラビア語ラバト方言の第三語根弱動詞について」『外国語・外国文学研究』16. pp. 1-14.
- 岡崎英樹 (1994)「受動文の主語をめぐるアラブ文法家の記述について」『外国語・外国文学研究』17. pp. 15-24.
- 岡崎英樹 (1999)「ターハー・フサインの著作からの同族目的語用例収集」『中東イスラム文化の諸相と言語研究——池田修先生ご退官記念論文集』大阪：大阪外国語大学. pp. 75-79.
- 岡崎英樹 (2001)「"Mubham タイプ"の同族目的語と文体——ターハー・フサインの場合」『関西アラブ・イスラム研究』1. pp. 31-51.
- 小笠原良治 (1980)「弱文字における変化」『季刊アラビア語』1. pp. 23-30.
- 小笠原良治 (1981a)「サルフ (語形論) について」『アジア・アフリカ語学院紀要』4. pp. 87-99.
- 小笠原良治 (1981b)「ハムザにおける変化」『季刊アラビア語』2. pp. 33-43.
- 岡野利雄，飯森嘉助 (編) (1978)『アラビア語会話——現代正則アラビア語 & クウェイト・イラク・ガルフ方言』東京：豊文社。
- 岡部正孝 (1960)「フランス語とアラビア語の間に——マルドリウス版千夜一夜物語の翻訳を終えて」『言語生活』105. pp. 56-62.
- 奥田 敦 (1999)「アラビア語とイスラーム共同体の法」『Keio SFC review』3. pp. 106-110.
- 奥西峻介 (1985)「中東の言語」岡崎正孝，末尾至行 (編)『中東をめぐる諸問題』京都：晃洋書房. pp. 84-99.
- 小高正直 (1966)「現代アラブ文化の問題——アラビア語とイスラム教」『東洋学術研究』4: 10. pp. 57-67.
- 回教園研究所研究調査部 (訳) (1939)「アラビアの国語問題」『回教園』3: 2. pp. 54-59.
- 外務省調査部 (1939-1940)「支那の文献に見えた西方回教園の言語 (1)-(2)」『回教事情』2: 4-3: 1. pp. 68-70, 83-87.
- カシュガリー・マフムード (著)，藤本勝次 (訳) (1957)「マフムード・カシュガリー『トルコ・アラビア語辞典』の翻訳 (地名篇)」『東西学術研究所彙報』5. pp. 1-35.
- 川崎寅雄 (1962-1965)「アラビア語入門 (1)-(12)」『サウディアラビア』6-17. pp. 21-26, 18-23, 17-28, 24-35, 25-36, 15-28, 14-20, 6-12, 16-22, 26-30, 28-31, 41-43.

- 川崎寅雄 (1963)『アラブ語辞典』東京：アラブ言語文化研究会。
 川崎寅雄 (1964)『アラビア語入門』東京：アラブ言語文化研究所。
 川崎寅雄 (1968)「アラビア語への招待——入門書と辞書案内」『学燈』65: 8. pp. 46-49.
 川崎寅雄 (1973)「アラビア語への招待——入門書と辞書案内」小林英夫(編)『私の辞書』東京：丸善. pp. 258-263.
 川崎寅雄 (1974)『アラビア語入門』東京：みき書房。
 川崎寅雄 (1975)『最新日・亜辞典』東京：アラブ言語文化研究会。
 Kawatoko, Mutsuo (1992) "On the use of Coptic numerals in Egypt in the 16th century" *Orient* 28. pp. 58-74.
 菊池憲一郎 (1940-1941)「韋駄天アラビア語 (1)-(10)」『回教世界』2:4-3:4. (巻末)
 黒田壽郎 (1980-1981)「新アラビア語講座 (1)-(4)」『アッサラーム』19-22. pp. 84-87, 102-105, 94-97, 88-91.
 黒柳恒男, 飯森嘉助 (1999)『現代アラビア語入門』東京：大学書林。
 桑本裕二 (1994)「標準アラビア語の完全/部分同化について——強勢音をめぐる分析」『東北大学言語学論集』3. pp. 85-101.
 桑本裕二 (1995a)「アラビア語におけるハムザ動詞の語根子音“?”について」『東北大学文学部日本語学科論集』5. pp. 13-24.
 Kuwamoto, Yuji (1995b) "Emphatics and pharyngeals in Arabic: An inspection of feature geometry"『東北大学言語学論集』4. pp. 57-70.
 桑本裕二 (1997)『アラビア語における分節音構造と音節構造の研究』東北大学博士論文。
 桑本裕二 (1998a)「アラビア語における半母音の削除について」『言語の内在と外在』東北大学文学部. pp. 303-334.
 桑本裕二 (1998b)「半母音と音節の型——アラビア語弱動詞からの証拠」『東北大学言語学論集』5. pp. 63-78.
 慶応義塾語学研究所 (1932)『アラビア語文法』東京：慶応出版社。
 小池百合子 (1983)『3日でおぼえるアラビア語』東京：学生社。
 小林寧子 (1993)「イスラム化の深層——ジャワの中のアラビア語借用語」『東南アジア——歴史と文化』22. pp. 95-121.
 小山皓一郎 (1977)「マフムード・カシュガリー『トルコ・アラビア語辞典』に見えるチュルク称号」『北方文化研究』11. pp. 39-61.
 近藤智子 (1995)「現代アラビア語の動詞“完了形”とその複合形の機能の違いについて」『言語学研究』14. pp. 1-35+36.
 近藤智子 (1999)「アラビア語の条件文における時制を表す動詞複合形について」『言語研究』115. pp. 109-140.
 Kondo, Tomoko (2001) "On the interpretation of *mā* Perfect/*lam* Jussive: *ḥattā* Perfect construction" *Zeitschrift für Arabische Linguistik* 39. pp. 36-52.
 サーレ・アーデル・アミン (1998)「19世紀末におけるエジプトの『民衆語』認識——エジプトにおける言語ナショナリズムの前夜 (1880-1990)」『日本中東学会年報』13. pp. 287-304.
 サーレ・アーデル・アミン (1999)『エジプトの言語ナショナリズムと国語認識——日本の「国語形成」を念頭において』東京：三元社。
 サーレ・アル=スレイマン (著) ジャパン・アラブ・アソシエイテッドマーケッツ (編) (1979)『アラビア語会話とガイド』東京：豊文社。
 榮谷温子 (1997)「アラビア語ダイグロシヤ研究の現状」『日本中東学会年報』12. pp. 329-363.
 榮谷温子 (1998a)『アラビア語における限定・非限定の意味と機能』東京外国語大学大学院地域文化研究科博士論文。
 榮谷温子 (1998b)「アラビア語の限定名詞句の用法——主に童話のテキストの書き出し部分について」『日本中東学会年報』13. pp. 257-285.

- 榮谷温子 (1998c) 「アラビア語フェズ方言における *bya* (～したい) と *xess* (～しなければなら
ない)」『アジア・アフリカ言語文化研究』55. pp. 255-278.
- 榮谷温子 (1999) 「情報構造としての限定・非限定——アラビア語の戯曲 'Arafa Kayfa Yamūtu
における *qunbulah* (爆弾) の用法を通して」『オリエント』42: 2. pp. 40-60.
- 榮谷温子 (2000a) 「クルアーンの物語テキストを通してみるアラビア語の限定名詞句の用法」『イ
スラム世界』54. pp. 1-25.
- 榮谷温子 (2000b) 「コンピューターによるアラビア語教育——カイロ・アメリカン大学アラビア
語インスティテュートによる教材制作」『日本中東学会年報』15. pp. 361-369.
- 榮谷温子 (評) (2000c) 「書評と紹介——本田孝一, 師岡カリマ・エルサムニー著『アラビア
文字を書いてみよう読んでみよう』白水社 (1999年4月5日刊)」『イスラム世界』54. pp.
120-122.
- 榮谷温子 (評) (2000d) 「書評と紹介——Aryeh Levin 著『Arabic linguistic thought and dialect
ology』」『イスラム世界』55. pp. 117-125.
- 佐久間貞, 川崎寅雄, 多田利雄 (監) (1960) 『日・英・アラビア語会話と語彙』東京: 南雲堂.
- 佐久間貞 (1974) 『日・英・アラビア語会話語彙 第2版』東京: 凸版.
- 佐々木淑子 (1997) 『アラビア語入門』相模原: 青山社.
- 佐々木淑子 (2000) 『アラビア語入門 (改訂版)』相模原: 青山社.
- 佐藤道雄 (1998) 「アラビア語サナア方言におけるいわゆる分析的属格の *hagg* について」『ニダ
ベ』27. pp. 20-27.
- サミール・アブド・ハミード (著), 平田伊都子 (訳) (1986) 『アラビア語のきまり文句』東京:
南雲堂.
- Salah el-Araby (1983) *Intermediate Egyptian Arabic: An integrative approach*. Tokyo: Institute
for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- サラーフ・アル・アラビィ, 中野暁雄 (編) (1982b) 『アラビア語エジプト方言会話入門 2』東
京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 蒔 勇造 (1988) 「南セム系アルファベットの起源と発展について」『比較文化雑誌』3. pp.
23-37.
- 四戸潤弥 (1996) 『現代アラビア語入門講座 (上・下)』東京: 東洋書店.
- 清水芳見 (1991) 「アラブ・ムスリムにおける親族名称の呼びかけ用法——ヨルダン北部一村落
の事例分析」『民族学研究』55: 4. pp. 433-454.
- シャイホ (1943) 『アラビア語初等読本』東京: 慶應義塾大学研究所.
- 杉沢 理 (1992) 『アラビア語商業経済用語集——日本語・英語かな表記付き』東京: 南雲堂フェ
ニックス.
- 杉沢 理 (1997) 『超やさしいアラビア語入門』東京: 南雲堂フェニックス.
- 鈴木弘明 (1968) 「アラビア語について」『海外事情』16: 11. pp. 73-80.
- Stevens, Faal B. (著), 江村裕文 (訳) (1998) 「チュニジアの言語状況——アラビア語とフラン
ス語の間で」『法政大学教養部紀要』103. pp. 127-150.
- 関根謙司 (1975) 「アラブ文学の律動と音韻について」『中東通報』230. pp. 14-18.
- 高井清仁 (1983-1986) 「新アラビア語講座 (1)-(7)」『アッサラーム』29-35. pp. 122-127,
120-124, 118-125, 110-118, 86-94, 42-49, 48-57.
- 高階美行 (1976) 「イラク方言の *k>ç, q>g* について」『言語研究』70. pp. 97-99.
- 高階美行 (1984) 「デダン語 (前古典アラビア語) 研究にむけて」『大阪外国語大学学報』64. pp.
283-312.
- 高階美行 (1988) 「アラビア語のビジン・クレオール」亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著) 『言
語学大辞典 第一巻 世界言語編 (上)』東京: 三省堂. pp. 483-487.
- 高階美行 (1989) 「イスラームの都市名——美称・異称とその変遷」『イスラームの都市性・研究報
告研究報告編』22. pp. 1-56.
- 高階美行 (1992) 「アラビア語の七不思議 (1)」『アルアラビーヤ』1. pp. 20-36.

- 高階美行 (1999) 「アラビア語の辞書」『中東イスラム文化の諸相と言語研究——池田修先生ご退官記念論文集』大阪：大阪外国語大学. pp. 81-105.
- 高階美行 (2001a) 「アラビア文字」河野六郎, 千野栄一, 西田龍雄 (編著) 『言語学大辞典 世界文字辞典』東京：三省堂. pp. 42-59.
- 高階美行 (2001b) 「古代北アラビア文字」河野六郎, 千野栄一, 西田龍雄 (編著) 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』東京：三省堂.
- 高野昌弘 (1994) 『トラベルアラビア語会話手帳——ことばに親しみこころに触れ合う旅』東京：語研.
- 武内道子 (1982) 「アラビア語における関係節」『言語研究』82. pp. 166-170.
- 田中四郎 (1957) 『アラビア語会話』東京：江南書店.
- 田中四郎 (1958a) 「アラビア語における『神』の墮落」『大阪外国語大学学報』6. pp. 154-164.
- 田中四郎 (1958b) 「アラビア語における『神』の墮落」『日本オリエント学会月報』1: 10. pp. 1-7.
- 田中四郎 (1963a) 『アラビア語文典』大阪：大阪外国語大学アラビア語学研究室マナーラ会.
- 田中四郎 (1963b) 『実用アラビア語会話』東京：大学書林.
- 田中四郎 (1964) 『アラビア語文マタイ伝抜粋』大阪：大阪外国語大学アラビア語研究室マナーラ会.
- 田中博一 (1999) 『日本語アラビア語基本辞典』東京：鳥影社.
- 谷口 勇 (1981) 「イブン・シーナーの音声学」『桃山学院大学人文科学研究』17: 1. pp. 45-88.
- 田村秀治 (1980) 『詳解アラビア語/日本語辞典』東京：中東調査会.
- 地球の歩き方編集室 (編) (1996) 『アラビア語/英語——エジプト・シリア・モロッコ方言』東京：ダイヤモンド・ビッグ社.
- 中東カウンセリングサービス (1993) 『科学技術基本用語集 日本語・英語・アラビア語』東京：中東カウンセリングサービス.
- 中東協力センター (編) (1982) 『アラビア語アラカルト』東京：中東協力センター.
- 戸部実之 (1992) 『実用アラビア語入門——文法日常会話単語集』東京：泰流社.
- 戸部実之 (1993) 『実用モロッコ (アラビア) 語入門——発音文法日常会話単語集』東京：泰流社.
- 戸部実之 (1996) 『実用アラビア語教程』東京：泰流社.
- 内記良一 (1964a) 「アラブ語における対義語について」『東京外国語大学論集』11. pp. 125-142+177-178.
- Naiki, Ryoichi (評) (1964b) "Review: John A. Haywood, *Arabic lexicography: Its history, and its place in the general history of lexicography*, Leiden, 1960" 『アジア・アフリカ文献調査報告10 西アジア3』.
- 内記良一 (1965a) 「アラブ語の不規則複数について」『言語研究』48. p. 68.
- 内記良一 (1965b) 「アラブ語明義論の展開」『東京外国語大学論集』12. pp. 75-89+163.
- 内記良一 (1965c) 「(近代アラブ語) の定義について」『東洋文化』38. pp. 19-26.
- 内記良一 (1966a) 「アラブ語における類義語の資料について」『東京外国語大学論集』13. pp. 9-26.
- 内記良一 (1966b) 「東方アラブ諸国における言語問題」『東洋研究』14. pp. 17-28.
- 内記良一 (1968) 「ターファ文法学の格概念について」『東京外国語大学論集』17. pp. 65-82+213.
- 内記良一 (1970) 「アラブ語文献における人物語詞の意味的極性について」『オリエント』11. pp. 105-119.
- 内記良一 (1979) 『基本動詞対照用例集 日本語/アラビア語』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 内記良一 (編) (1980a) 『アラビア語小辞典』東京：大学書林.

- 内記良一 (1980b) 「アラビア語 600 語選」『AA 諸語言語教育基本語彙表——入門期の学習に必要な基礎語彙 600 項目試案』東京：東京外国語大学。
- 内記良一 (1980c) 「(増す) に伴う対格名詞の省略について」『季刊アラビア語』1. pp. 31-38.
- 内記良一 (1981a) 「アラビア系文字の発展」『講座言語5 世界の文字』東京：大修館書店. pp. 159-180.
- 内記良一 (1981b) 「イスラムの文字と言語——アラブの文学」『イスラム世界——その歴史と文化』京都：世界思想社. pp.50-61.
- 内記良一 (1983a) 『基礎アラビア語』東京：大学書林。
- Naiki, Ryoichi (1983b) "From Pahlavi Aōvên(ak) to Arabic 'Adab: With special reference to Aōvên Nâmak of strategy" 『東京外国語大学論集』33. pp. 73-87.
- 内記良一 (1984) 『アラビア語常用6000語』東京：大学書林。
- 内記良一 (1986a) 「アラビア語における『神』の呼称」『東京外国語大学論集』36. pp. 45-60.
- 内記良一 (1986b) 『やさしいアラビア語読本——イスラムの教え・アラブの笑い』東京：大学書林。
- 内記良一 (1992) 「アラビア語における『物質』論」『東京外国語大学論集』45. pp. 1-10.
- 内記良一 (1999) 『日本語アラビア語辞典』東京：大学書林。
- 内記良一・牧野信也 (1966) 「アラビア地域における国語教育資料の調査研究」河部利夫(編)『アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp. 47-49.
- 内藤浩二 (1993) 「パソコンでアラビア語を使いましょう」『中東研究』377. pp. 8-12.
- 中江加津彦 (1993) 「アラビア語の修辭動詞について」『言語学論叢』別号(松本克己教授退官記念論文集) pp. 11-57.
- 中江加津彦 (1996a) 「アラビア語における ḥal として解釈される maṣdar——アラブ伝統文法学において」『言語文化学会論集』6. pp. 31-54.
- 中江加津彦 (1996b) 「アラビア語の文構造における対格名詞の果たす役割について」『言語文化学会論集』7. pp. 43-69.
- 中江加津彦 (1997a) 「動詞に含まれる意味と文法関係——アラブ伝統文法学において」『言語文化学会論集』8. pp. 119-158.
- 中江加津彦 (1997b) 「アラビア語における原因構文 fa al-sababiyyah の実現条件について——アラブ伝統文法学において」『言語文化学会論集』9. pp. 169-223.
- 中江加津彦 (1998a) 「等位接続と話し手の思い込み——アラブ伝統文法学における tawahhum の意味」『言語文化学会論集』10. pp. 167-191.
- 中江加津彦 (1998b) 「古典アラビア語における品詞の異なる語句の等位接続について」『言語文化学会論集』11. pp. 111-116.
- 中江加津彦 (1999) 「現代口語アラビア語イラク方言及びパレスチナ方言の形容詞節——文法化の一定方向性に対する反例として」『言語文化学会論集』12. pp. 113-142.
- 中田吉信 (1963-1964) 「アラビア語の学習書について (1)-(6)」『アジア・アフリカ資料通報』1: 7-9, 2: 1, 4, 6. pp. 8-16, 10-12, 13-16, 11-16, 12-16, 13-16.
- 中野暁雄 (1966) 「古典アラビア語における形式の自由度について」『言語研究』49. pp. 70-76.
- 中野暁雄 (1972) 「空間を表す形容詞の意味分析——アラビア、ヘブライ語」服部四郎先生定年退官記念論文編集委員会(編)『現代言語学』東京：三省堂. pp. 275-297.
- 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビィ(編) (1982) 『アラビア語エジプト方言会話入門 1——ローマ字・アラビア字テキスト』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Nakano, Akio (1982) *Folktales of Lower Egypt 1: Text in Egyptian Arabic 1* (Studia Culturae Islamicae 18). Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Nakano, Akio (1986) *Comparative vocabulary of Southern Arabic: Mahri, Gibbali and Soqotri* (Studia Culturae Islamicae 29). Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of

- Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 中野曉雄 (1988)「アラビア語諸方言」亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著)『言語学大辞典 第一巻 世界言語編 (上)』東京: 三省堂. pp. 472-483.
- 中野曉雄 (1998a)「アフロ・アジア語の音声・音韻——子音素論」『音声研究』2. pp. 9-30.
- 中野曉雄 (1998b)「西アラブ・マルタから見た地中海」『言語』27: 10. pp. 88-95.
- 中野英治郎 (1941a)「アラビア文字の起源」『回教世界』3: 12. pp. 1-18.
- 中野英治郎 (1941b)「埃及王立アラビア語学会について」『回教世界』5: 5. pp. 67-72.
- 中林隆明 (1975)「続・アラビア語の学習書について (1)-(2)」『アジア・アフリカ資料通報』12: 11-12. pp. 21-25, 19-24.
- Nakamichi, Shizuka (1999) "On the functions of the Arabic connectives *wa* and *fa* in narrative texts" 『アジア・アフリカ言語文化研究』58. pp. 221-261.
- Nakamura, Kojiro (1974) "Ibn Mada's criticism of Arabic grammarians" *Orient* 10. pp. 89-113.
- 中村満次郎 (1961)「アラビヤ文字考——アラビヤ書誌学 (3)」『ビブリア』18. pp. 50-55.
- 新妻仁一 (1992)「実用シリア方言会話 (1)」『アルアラビヤ』1. pp. 121-133.
- 新妻仁一 (1994)「シリア正教会と言語教育」『亜細亜大学アジア研究所研究プロジェクト報告書 No. 7 アジアの言語・教育・宗教』.
- 新妻仁一 (1996)「アラビア語の教詞の意味と『13』の物語——ダマスカスの民話から」『東と西 (亜細亜大学言語・文化研究所)』14. pp. 72-100.
- 新妻仁一 (1997)「シリア方言会話ノート」『アジアの言語・教育・宗教 (その2)』(アジア研究所・研究プロジェクト報告書 No. 15) 武蔵野: 亜細亜大学アジア研究所. pp. 39-66.
- 新妻仁一 (共著) (1998)『世界の言葉散策——目は口ほどにものを言うか』東京: 三修社.
- 仁賀保成史 (1976-1977)「アラビア語講座 (1)-(5)」『アッサラーム』5-9. pp. 59-62, 76-79, 86-89, 61-63, 80-83 + iii-iv.
- 西尾哲夫 (1984)「古代アラビア語の所謂動詞派生形 II 形について——テンス・アスペクト体系に関する一仮説」『言語学研究』3. pp. 23-55.
- Nishio, Tetsuo (1986) "On the pronominal suffixes in Proto-Colloquial-Arabic" 『言語学研究』5. pp. 1-24.
- Nishio, Tetsuo (1988a) "On the modal function of the Arabic particle *qad*: A contribution to the typology of modality" 崎山理, 佐藤昭裕 (編)『アジアの諸言語と一般言語学』東京: 三省堂. pp. 313-340.
- 西尾哲夫 (1988b)「『能力表現』の語用論——日本語とアラビア語の対照研究」『言語学研究』7. pp. 153-184. (『日本語学論説資料』26: 1 (論説資料保存会) (1989) pp. 183-99. 再録)
- Nishio, Tetsuo (1989a) "On the non-causative usage of the causative form in Arabic" 『日本中東学会年報』4: 2. pp. 1-45.
- 西尾哲夫 (1989b)「現代アラビア語における都市方言の成立——ビジン・クレオール観点から」『イスラムの都市性・研究報告研究報告編』45. pp. 1-27.
- 西尾哲夫 (1990)「アラビア語エジプト方言の疑問詞の語順について——コプト語影響説の再検討」『イスラムの都市性・研究報告研究報告編』94. pp. 1-29.
- 西尾哲夫 (1991)「16-17世紀のアラビア語エジプト方言——大英博物館所蔵ゲネザ文書 Or. 7768 を資料として」『オリエント』34: 2. pp. 54-73.
- 西尾哲夫 (1992a)『アラビア語エジプト方言入門 (1, 2)』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 西尾哲夫 (1992b)「アラビア語研修報告 (平成4年度言語研修報告 III)」アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』76. pp. 26-33. (「(1992)アラビア語 (エジプト方言) 研修報告」『アジア・アフリカ言語文化研究所言語研修報告1967-1993』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (1994) pp. 339-46. 再録)
- Nishio, Tetsuo (1992c) *A basic vocabulary of the Bedouin Arabic dialect of the Jbāli tribe (Southern Sinai)*—*Studia Sinaitica I* (Studia Culturae Islamicae No. 43). Tokyo: Institute for

- the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa. xviii+238p.
- 西尾哲夫 (1993) 「アラビア語」『日本語学 (特集世界の女性語・日本の女性語)』12: 6 (5月臨時増刊号) 明治書院. pp. 24-27.
- Nishio, Tetsuo (1994) *The Arabic dialect of Qift (Upper Egypt) (Asian and African Lexicon 27)*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa. 332p.
- Nishio, Tetsuo (1995) "Characteristics of the Arabic Dialect of Qift (Upper Egypt)" 『アジア・アフリカ言語文化研究』48/49(合併号). pp. 173-219.
- 西尾哲夫 (1996a) 「アラビア語圏 (言語ジャーナル 14)」『言語』25: 2. pp. 92-93.
- 西尾哲夫 (1996b) 「(入門・世界の言語) アラビア語とヘブライ語」『アルク地球人ムック——第二外国語をモノにするためのカタログ '97』アルク. pp. 87-88.
- Nishio, Tetsuo (1996c) "Word order and word order change of Wh-questions in Egyptian Arabic: The Coptic substratum reconsidered" In J. Cremona, C. Holes, and G. Khan (eds.) *Proceedings of the 2nd International Conference of L'Association Internationale pour La Dialectologie Arabe*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 171-179.
- Nishio, Tetsuo (1996d) "Where does the Wadi come from?: The cognitive space of the Sinaitic bedouin" In S. Sato ad E. Kurimoto (eds.) *Essays in Northeast African Studies* (Senri Ethnological Studies 43), Osaka: National Museum of Ethnology. pp. 189-206.
- 西尾哲夫 (1997) 「世界の女性語——アラビア語」井出祥子 (編) 『女性語の世界』東京: 明治書院. pp. 141-147.
- 西尾哲夫 (1999) 「神の選びたまいし言葉——アラブ・ナショナリズムと汎イスラミズムの中のアラビア語」庄司博史 (編) 『ことばの20世紀——20世紀における諸民族の伝統と変容 6』東京: ドメス出版. pp. 117-131.
- Nishio, Tetsuo (2000) "A linguistic study of a vocalized Judaeo-Arabic commentary on the Song of Songs from the Cairo Genizah" In M. Mifsud (ed.) *Proceedings of the 3rd International Conference of L'Association Internationale pour La Dialectologie Arabe*, Malta: University of Malta Press. pp. 59-64.
- Nishio, Tetsuo (2001) "Language nationalism and consciousness in the Arab world" In T. Nishio (ed.) *Cultural Change in the Arab World* (Senri Ethnological Studies 55), Osaka: National Museum of Ethnology. pp. 137-146.
- 西尾哲夫, 師岡カリマ・エルサムニー (1997) 『エクスプレス エジプト・アラビア語』東京: 白水社.
- 日本クウェイト協会 (1979) 『実用アラビア語会話集』東京: 日本クウェイト協会.
- 奴田原睦明 (1980) 「エジプトの現代小説に見る方言」『月刊言語』9: 8. pp. 38-43.
- Nutahara, Nobuaki (1982) "Arabic terminology pertaining to water in the Syrian desert" In I. Kobori (ed.) *Case studies of Foggara Oasis in the Algerian Sahara: The Tokyo University Scientific Mission for the Comparative Study of Foggara Oasis in the Arid Zone of the Old Continent, Report No. 2*, pp. 53-65.
- 奴田原睦明 (1988) 「アラビア語に見られる特徴点について」『学習院大学言語共同研究所紀要』10. pp. 39-48.
- 奴田原睦明, 岡 真理 (1989) 『エクスプレス アラビア語』東京: 白水社.
- 奴田原睦明 (1988) 「ベドウィンのことば」『言語』29: 5. pp. 2-3.
- 信森広光 (1985) 「マルタ語とアラブ語の音韻機能——マルタ語の言語史的視点から」『山口大学文学会誌』30. pp. 119-142.
- 信森広光 (1991) 「イタリア・シチリア方言のアラブ語との相関」『山口大学文学会誌』42. pp. 103-109.
- 羽田 明 (1963) 「カシュガリーと『トルコ・アラブ語辞典』」『岩井博士古希記念典籍論集』東京: 岩井博士古希記念事業会. pp. 521-526.
- 濱田聖子 (1999) 「ジャーヒズとアラブ修辞学の形成過程」『日本中東学会年報』14. pp. 219-247.

- 伴 康哉 (1958)「セム語人称接尾語に関する一考察」『大阪外国語大学学報』6, pp. 142-153.
- 伴 康哉 (1980)「FA 'AL-i 型の名詞」『季刊アラビア語』1, pp. 9-16.
- 伴 康哉 (1981a)「動詞型あれこれ」『季刊アラビア語』2, pp. 6-18.
- 伴 康哉 (1981b)「私のアラビア語研究50年」『中東研究』299, pp. 1-10.
- 伴 康哉 (1986)「アラブ否定語 MÂ の特殊用法」『三笠宮殿下古希記念オリエント学論集』東京：小学館, pp. 261-281.
- 平田伊都子 (1979)『アラビア語の初歩の初歩』東京：南雲堂.
- 平田伊都子 (1986-1987)「アラビア語のすすめ (1)-(6)」『月刊言語』15: 11-12, 16: 1-4, pp. 27-33, 210-216, 98-104, 99-105, 102-108, 100-107.
- Bouslama, Faouzi (1999)『ペン入力アラビア語の単語認識システム構築・調査』広島：広島市立大学.
- 福島弘恵 (1996)「インドネシア語におけるアラビア語源の借用語の接辞について」『言語と文化』2, pp. 73-89.
- Fukuhara, Nobuyoshi (1974) "The phonetic shift of sibilants in Arabic"『大阪外国語大学学報』30, pp. 15-28.
- 福原信義 (1989)「平成元年度言語研修報告 (2)——アラビア語 (エジプト方言) 研修について」アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』67, pp. 21-25.
- 福原信義 (1994)『アラビア語会話教本——アラビア語で話しましょう』大阪：大阪外国語大学.
- 藤井章吾 (1985)「エジプト民話集」『世界口承文芸研究』6, pp. 289-362.
- 藤井章吾 (1986a)「<'uqbā-l> 表現について」『外国語・外国文学研究』10, pp. 29-42.
- 藤井章吾 (1986b)「エジプト民話集 (第2集)」『世界口承文芸研究』7, pp. 463-558.
- 藤井章吾 (1989a)『アラビア語 (エジプト方言) 文法練習』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Fujii, S. (1989b) "Paradigms: Egyptian colloquial Arabic".
- 藤井章吾 (1992a)「エジプト口語ノート (1)」『アルアラビヤ』1, pp. 108-120.
- 藤井章吾 (1992b)「<mimmā 構文> について (1)」『アルアラビヤ』1, pp. 92-102.
- 藤井義久 (1999)「高アラビア語の第2根素弱動詞に関する研究ノート——最適性理論の観点から」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』20, pp. 219-226.
- 藤本勝次 (訳) (1957)「マフムード・カシュガリー『トルコ・アラビア語辞典』の翻訳 (地名編)」『東西学術研究所彙報』5, pp. 1-35.
- 布施 温 (1970)「スペイン語とアラビア語」『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』6, pp. 27-43.
- 布施 温 (1982)「なぜアラビア語の Sîn はスペイン語の S に対応しなかったか？」『宮城昇教授還暦記念論文集』東京：東京スペイン語語学研究会, pp. 63-79.
- 補助教材開発アラビア語班 (編) (1977-1979)『亜日常用語彙集』大阪：大阪外国語大学.
- 堀内 勝 (1980a)「遊牧民の言葉, 定住民の言葉——住居に関する語彙の変容」『月刊言語』9: 8, pp. 22-27.
- 堀内 勝 (1980b)「コーラン読みとコーラン読誦学」『月刊言語』9: 8, pp. 36-37.
- 堀内 勝 (1980c)「ムクタの芸術——詩の視覚的側面の追求」『季刊アラビア語』1, pp. 39-54.
- 堀内 勝 (1981)「アラビア語『回文』芸術——言語芸術の視覚的側面の追求 (2)」『季刊アラビア語』2, pp. 44-60.
- 堀内 勝 (1984)「アラブ民族の『土』の概念——言語分析による概念構造化」『季刊アラビア語』1, pp. 27-54.
- 堀内 勝 (1985)「アラブのリズム観——西アジア遊牧生活からの発想」『口頭伝承の比較研究』2, pp. 26-58+290.
- 堀内 勝 (1991)「アラビア語 (特集・世界の言語 70+1(上))」『月刊言語』20: 5, pp. 28-29.
- 堀内 勝 (1998)「最も文語と口語の違いが大きな言語」『月刊言語』27: 5, pp. 77-81.

- 本田孝一 (1982-1983)『たのしいアラビア語 (1)』東京：たまいらば。
- 本田孝一 (1985)『たのしいアラビア語 (2)』東京：たまいらば。
- 本田孝一 (1991)「アラビア語書道の各スタイルにおけるアルファベットの立体的分析」『日本中東学会年報』6. pp. 197-265.
- 本田孝一 (1993a)「アラビア語書道の各スタイルの美の諸要素についての研究 (前半部)」『日本中東学会年報』8. pp. 127-167.
- 本田孝一 (1993b)「アラビア語書道の各スタイルの美の諸要素についての研究 (後半部)」『日本中東学会年報』9. pp. 241-271.
- 本田孝一 (1993c)『アラビア語の入門』東京：白水社。
- 本田孝一 (1998a)『アラビア語の入門 (改訂版)』東京：白水社。
- 本田孝一 (1998b)『ステップアップアラビア語』東京：白水社。
- 本田孝一, 石黒忠明 (1997)『パスポート初級アラビア語辞典』東京：白水社。
- 本田孝一, 師岡カリーマ・エルサムニー (1999)『アラビア文字を書いてみよう読んでみよう——アラビア文字への招待』東京：白水社。
- 前嶋信次 (評) (1951)「井筒俊彦『アラビア語入門』」『史学』25: 11. pp. 114-118.
- 前嶋信次 (1980a)「『アラビア語』への楽しい期待」『季刊アラビア語』1. pp. 1-8.
- 前嶋信次 (1980b)「アラブの心・その言葉」『月刊言語』9: 8. pp. 2-5.
- 前田のぶお (1998)『スペイン語の中のアラビア語起源小辞典——イスラム・スペイン800年の言葉と文化の遺産』東京：げいりん書房。
- Makino, Shinya (1961)“Über die Verneinung Durch mā im Arabischen: Ein Beitrag zur Affekt-syntax der semitischen Sprache”『言語研究』39. pp. 136-147.
- 牧野信也 (1963a)「アラビア語動詞意味構造に関する一試論」『東京外国語大学論集』10. pp. 97-109+191-192.
- Makino, Shinya (1963b) *Zum semantischen Aufbau der neuarabischen Verben*. Tokyo: The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies.
- 牧野信也 (1979)『アラブ的思考様式』東京：講談社。
- 牧野信也 (1986)「アラビア語 (日本語動詞のすべて特集——諸言語の動詞と日本語の動詞)」『国文学解釈と鑑賞』51. pp. 163-164.
- 松田伊作 (1981a)「セム・ハム諸語」北村甫 (編)『講座言語 6 世界の言語』東京：大修館書店。pp. 49-77.
- 松田伊作 (1981b)「アラビア語エジプト方言における $C_1C_2C_1C_2$ 動詞について」『九大言語学研究報告』2. pp. 21-41.
- 松田伊作 (1985)『アラビア語』亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著)『言語学大辞典 第一巻 世界言語編 (上)』東京：三省堂。pp. 463-472.
- 松本重彦 (1936)『西南亜細亜言語の系統』『東洋文化の源流, 東洋文化の交流, 東洋史の時代相』東京：岩波書店。pp. 1-62.
- 丸山茂夫 (1978)『日本語の起源——アラビア語のすすめ』東京：アラビア語渋谷教室出版部。
- 蜜木アリフ, イサム・サード, ゴマ・アハマド (1999)『アラアアかんたんアラビアン——エジプト・ことばと文化』東京：本の泉社。
- 宮地一雄 (1987)「アラビア語化とベルベル運動——アルジェリア」宮治一雄 (編)『中東のエスニシティ——紛争と統合』東京：アジア経済研究所。pp. 165-197.
- 宮本雅行 (1991)『分野別 アラビア語単語帳』東京：中東調査会。
- 宮本雅行 (1992)「現代アラビア語の『同格』表現」『アルアラビーヤ』1. pp. 87-91.
- 三好準之助 (1984)「スペイン語語彙のなかのアラビズムに関する移入機構の分析モデル」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』5: 2. pp. 12-31+29-31.
- 元好朗子 (1995)「アメリカのアラビア語教育事情」アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』83. pp. 39-43.

- Mohamed, Hanan Rafik (1990)「アラビア語のカイロ方言の咽頭化子音と非咽頭化子音の Phono-Laryngograph による分析」『言語学論叢』9. pp. 51-64.
- 森晋太郎 (1999)「アラブ近代文学におけるアラビア語とジュブラーン・ハリール・ジュブラーンのアラビア語観」『日本中東学会年報』14. pp. 1-20.
- 森 伸生 (1992)「アラビア語教育の現場から」『アルアラビーヤ』1. pp. 103-107.
- 森 伸生 (1993)「中東世界の現状——フランス統治下におけるアルジェリアのアラビア語復興運動」『海外事情研究所報告』27. pp. 201-211.
- 森口明美 (2001a)「古典アラビア語における条件文の通時的变化に関する試論」『日本中東学会年報』16. pp. 155-174.
- 森口明美 (2001b)「古典アラブ文学における言語現象の把握——条件文に関する記述からの一考察」『関西アラブ・イスラム研究』1. pp. 115-130.
- 森村 著 (1977)「インドネシア語にみるアラビア語受動分詞からの外来語」『大阪外国語大学学報』39. pp. 253-265.
- 森村 著 (1981)「インドネシア語に見られるアラビア語格母音の名残」『大阪外国語大学学報』52. pp. 95-104.
- 矢島文夫 (1961a)「アラビア語の学習における基礎語彙について」『東洋研究』1. pp. 43-47.
- 矢島文夫 (1961b)「アラビア文語における強意文形式——その語源のおよび言語構造的解釈」『言語研究』40. pp. 89-90.
- 矢島文夫 (1966)『アラビア語基礎1500語 (増補版)』東京：大学書林.
- 矢島文夫 (1968)「アラビア語文法ノート (1)——未完了動詞基本形の第2音節の母音について」『アジア・アフリカ語学院紀要』1. pp. 109-118.
- 矢島文夫 (1969a)「アラビア語文法ノート (2)——*nwl, *nyl およびその同族語根について」『アジア・アフリカ語学院紀要』2. pp. 35-42.
- 矢島文夫 (1969b)「東と西のあいだの言語状況——アラビア語を中心に」『国際文化』178. pp. 14-17.
- 矢島文夫 (1972)「アラビア語文法ノート (3)——milh (塩) と mallāh (水夫)」『アジア・アフリカ語学院紀要』3. pp. 119-124.
- 矢島文夫 (1973)「オリエント言語史の諸断面」『月刊言語』2: 3. pp. 2-9.
- 矢島文夫 (1980-1982)「アラビア語の系統について (1)-(3)」『季刊アラビア語』1-3. pp. 55-60, 61-67, 44-52.
- 矢島文夫 (1980)「日本語に入ったアラビア語」『月刊言語』9: 8. pp. 50-51.
- 矢島文夫 (1981)「ヨーロッパにおけるアラビア語学の伝統——ライトの文法書とレーンの辞典の形成をめぐる」『法学研究』54: 3. pp. 543-554.
- 矢島文夫 (1981)「アラビア語ワードプロセッサ協同開発についての報告」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』5: 2. pp. 8-11.
- 矢島文夫 (1985)「二つの視点——民族と言語」矢島文夫 (編)『民族の世界史11 アフロアジアの民族と文化』東京：山川出版社. pp. 232-243.
- 矢島文夫 (1986a)「アラビア=ヘブライ文法史研究序説」『上智アジア学』4. pp. 115-120.
- 矢島文夫 (1988)「アラビア語のいわゆる〈アスペクト〉について」『学習院大学言語共同研究所紀要』10. pp. 3-7.
- 矢島文夫 (1991)「アラビア語のオノマトペ」『学習院大学言語共同研究所紀要』13. pp. 97-102.
- 矢島文夫 (1992)「アラビア文字の話」『アルアラビーヤ』1. pp. 5-19.
- 安井義光・アシュラフ (1980)「アラビア語の第3語根軟子音動詞未完了形2人称女性単数形とその男性複数形の活用についての考察」『季刊アラビア語』1. pp. 61-71.
- 安井義光・アシュラフ (1981)「アブドゥー・ル・カーヒルの意味論について」『アジア・アフリカ語学院紀要』4. pp. 101-105.
- 山路きみ子 (1952a)「コーランの Romanization について」『言語集録』2. pp. 71-76.
- 山路きみ子 (1952b)「コーランの Punctuation について」『言語集録』3. pp. 65-70.

- 山路きみ子 (1953) 「コーランにおける秘句の研究」『言語集録』4. pp. 65-77.
- 山路きみ子 (1955) 「アラブ語発音考」『言語集録』6. pp. 41-66.
- 山路広明 (1952a) 「アラビア語の Triliteralism と Biliteralism」『言語集録』1. pp. 37-40.
- 山路広明 (1952b) 「アラビア語語根辞典」『言語集録』1. pp. 40-57.
- 山路広明 (1966) 「Arabic Lexicography の諸問題」『早稲田大学図書館紀要』7. pp. 172-182.
- 山路広明 (1971) 「コーランにみる異形の語——その他について」『早稲田大学図書館紀要』12. pp. 61-67.
- 山路広明 (1979) 『アラブ語形態論』東京：著者刊.
- 山路広明 (1982-1987) 『アラブ語形態論 続1-続14』東京：南方言語研究所.
- 山本啓二 (1982) 「マルタ語とアラビア語 (1)——アラビア語起源のマルタ語動詞」『季刊アラビア語』3. pp. 60-84.
- 山本啓二 (1997a) 「共同研究『西アジアの言語文字のコンピュータによる処理』報告——アラビア語学習者のための動詞活用表」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』18. pp. 209-245.
- 山本啓二 (1997b) 「資料 アラビア語学習者のための動詞活用表 (2)」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』19. pp. 355-380.
- 湯川 武 (1987) 「アラビア語と私」『三色旗』469. pp. 24-26.
- 吉田左源二 (1978) 「アラビア語書道の発展」『月刊シルクロード』4: 7. pp. 70-74.
- 吉田秀太郎 (1957) 「イスパニア語に及ぼしたアラビア語の影響」『大阪外国語大学学報』5. pp. 95-112.
- Yoshida, Shōhei (評) (1986) "*Al-Kitāb, vol II, By Sībawayhi, Abū Bishr 'Amr, Reprint of Būlāq Edition, Baghdad: Al Muthannā Press, 1968, pp. 404~*"『言語研究』90. pp. 191-201.
- 吉田昌平 (1998) 「Government Phonology における音韻のライセンスとアクセント付与について——アラビア語カイロ方言の分析」『音韻研究』1. pp. 185-192.
- 吉町義雄 (1952, 1953, 1954, 1956, 1957, 1960, 1963, 1966) 「イブン・マリークの千一行詩垂語文法」『文学研究』43, 47, 50, 54, 56, 59, 62, 63. pp. 82-108, 57-77, 97-114, 57-72, 83-100, 81-98, 111-125, 85-137.
- 吉町義雄 (1977) 「イブン・マリークの垂語文法詩第三語根論」『関西外国語大学研究論集』25. pp. 1-30.
- Yoda, Sumikazu (2000a) *A description of the Arabic dialect of the Jews of Tripoli (Libya) Grammar, texts and glossary*. Unpublished Ph.D. dissertation, Jerusalem: The Hebrew University.
- Yoda, Sumikazu (2000b) "The correlation between short vowel subsystem and long vowel system in the modern Maghribi dialects"『日本中東学会年報』15. pp. 91-125.
- ライト, W. (著), 後藤三男 (訳) (1987) 『アラビア語文典 (上・下)』東京：ごとう書房.
- Ratcliffe, Robert R. (2001) "On the phonology of writing systems: what Arabic and Kana have in common"『音韻研究』4. pp. 89-96.
- Liggett, Michael L. (1996) "Arabic, Persian and Turkish: A survey of linguistic, cultural and sociological determinants of 'Learnability' vs. 'Difficulty'"『武蔵野女子大学紀要』31. pp. 97-111.
- リンガフォン 『リンガフォン アラビア語コース』東京：リンガフォン.
- 早稲田大学図書館 (編) (1965) 『アラビア語翻字便覧』東京：早稲田大学図書館.
- Wahba, Kassem M. and Miller, Catherine (1997) "Egyptian Arabic and dialect variation: Critical observations"『日本中東学会年報』12. pp. 277-311.
- Walker, Michael J. (1999) "The Arabic language and its dialects"『近畿大学語学センター紀要』8. pp. 52-68.